

## 昆虫分布調査のむずかしさ

奥谷 禎一

昭和53年度に環境庁の委託で、全国の昆虫分布調査を行った。その結果の1部が6月の環境週間に発表されたことは、御存じの通りで、この中で目玉になりそうなものとして、指標昆虫としてとりあげられたタガメの現状が発表され、その後「絶滅したかと思われる県」から発見され、調査のずさんなことが新聞紙上に報道された。その後、各県担当の調査者に紹介して、岐阜県では平野部に、滋賀県では山間部に残存していることがわかり、新潟・福岡の両県にも小数ながら残存しているらしいと情報が入った。

このような広範囲の調査で、調査洩れが出ることは常識の範囲ではあるが、分布調査やアセスメントの場合一番問題となることは、昆虫類の発生状況に年次変動をとまなうことである。1970年頃から、奈良市のルーミスジミが消えてしまったことは、チョウに関心のうすい人々でもよく知っていて、多分殺虫剤(BHC)の空中散布だろうと片付けられている。その実態を知るために、奈良県内の空中散布に関係した人々にきいたが、どうも全面に無差別に散布したわけではなさそうで、他の原因もあるように考えられる。日光課では、市内の食草であるイチイガシが住宅事情の悪化とともに切られたことが原因となっているのではないかといわれた。しかしこの頃から、三重県の神宮の森から姿を消していることなどを考えると、どうやら近畿のルーミスジミは年次変動の谷間に入りこんでしまっているのではないかと思われる。年次変動がどんな原因でおこるのかは、未知ではあるし、このルーミスジミが回復するという保障もない。兵庫県には現在の所、確認された産地はないが、宝塚市や神戸市で見かけたという話を聞く。昨年から今年にかけて、宝塚市の文化財としての昆虫類調査をやっているが、採集に協力して頂いた方から本種をみかけたと聞いた。食草のイチイガシもかなりあるので、本当に分布しているのかも知れない。ただ、話だけで現物が得られていないのは困ったことと思っている。

発生個体数に年次変動があることは、昆虫類の分布調査や、環境影響事前調査に充分気をつけなければならない1つの問題点であろう。

兵庫昆虫同好会でも、個体数の年次変動を目標にして目立つ種類でよいから情報を集めてはどうだろうか。例えば、通勤・通学の途上で見たモンキアゲハの数を記録しておき、1979年は6～9月の間に10頭という工合に報告をし、毎年「きべりはむし」に記録を止めておくのである。数年、数ヶ所の記録がまとまれば、何年毎に多発の年があるなどわかってくるのではなからうか。